

母性看護実習における「命の尊厳」のとらえ方

Thought about the dignity of the life in the maternal nursing practice

藤邊 祐子 坂本 保子 羽入 雪子

要約 本研究は母性看護実習終了後に学生が「命の尊厳」をどのようにとらえたかを分析し、実習指導の示唆を得る目的で行った。対象者は看護系短期大学生84名で、自由記述されたデータを内容分析した結果、「命・母性に関連するカテゴリー」「自分と周囲の人との関係に関連するカテゴリー」「医療や実習に関連するカテゴリー」「命に対する価値観に関連するカテゴリー」という4つのカテゴリーが見出された。学生は、実習を通して「命」の重みを学び、褥婦と新生児の看護を体験していく中で「自分も周囲の支えがあって成長してきた」と気づきを得られていた。また、医療における「看護師の役割」を再認識し、命の尊厳について問われることで、命に対する価値観を表現できていた。

母性看護実習で学ぶことのできる生命の誕生、新しい命を育むという場面から、「命の尊厳」について考え学ぶことのできる教育や実習指導が重要であることが示唆された。

キーワード：母性看護実習、命、看護学生

I. はじめに

わが国における看護学基礎教育では、カリキュラムに看護学実習が含められ、看護実践能力向上のために経験を活かした教育が行われてきた。

2011年、文部科学省¹⁾は「学士課程にお

いてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」において、看護実践能力5つの能力群とそれぞれの群を構成する20の看護実践能力について定義している。その中の「ヒューマンケアの基本に関する実践能力」では、「看

護の対象となる人々の尊厳と権利を擁護する能力が必要である」と定義している。2003年、看護職能団体である日本看護協会²⁾では15条からなる「看護者の倫理綱領」を発表し、条文に「看護者は人間の生命、人間としての尊厳および権利を尊重する」と明記している。さらに、条文には解説があり、「看護者の行動の基本は、人間の生命と尊厳の尊重である。看護者は病院をはじめさまざまな施設や場において、人々の健康と生活を支える援助専門職である、人間の生と死という生命の根元にかかわる問題に直面することが多く、その判断および行動には高い倫理性が求められる」と述べられている。

命の有限性や存在などに対する深い理解へと導く「命の尊厳」について理解し、「命の尊厳」とは何かという自己の考えをまとめることは看護の基礎教育に欠かせないと考えられる。このことから看護学基礎教育で実習の体験を通して「命の尊厳」について考え、尊重する姿勢を養うための指導が必要である。

糸島⁹⁾は死生観形成に関する調査で、「看護教育において終末期看護や死別経験をした時々に生じる感情を大切にし、意識化させな

がら、ひとりひとりが、一人称、二人称、三人称の〈生〉と〈死〉の意味を円環させ考える教育は、死生観を育てていく上で重要である」と述べている。また、石田ら⁸⁾は「終末期教育に対する示唆を得るための看護学生の死生観に影響する要因」の中で、「学生は講義の中で生と死に関する知識を習得する必要がある」と述べている。このことから、終末期教育においては「死」について考えることで「命の尊厳」を学んでいると考えられる。

これまで、母性看護実習で学んだことを振り返った学生のレポートでは、命の誕生場面に焦点をおいた回答が多かった。母性看護では、特に「生命の誕生」という場面での「命の尊厳」について学ぶ唯一の実習と位置づけられる。そのため、母性看護実習で学生が「命の尊厳」をどのように考え、とらえたかを知り、実習指導の方向性を得る目的で行った。

本学は、2009年に短期大学看護学科が開設され、2016年に4年制大学へ移行している。2017年は短期大学での母性看護学を指導する最後の機会となり、指導内容を見直し、大学教育への示唆を得たいと考える。

II. A 短期大学看護学科での母性看護実習の概要

1. 母性看護学科目

A 短期大学看護学科の学生は母性看護学に関する科目を2年次前期に母性看護論(1単位30時間)、2年次後期に母性看護援助論(1単位30時間)、3年次に母性看護実習(2単位90時間)を履修している。

2. 母性看護実習

母性看護実習は、2単位90時間の配当となっており、母性看護論、母性看護援助論の単位取得後に行われる臨地実習である。母性看護実習の目的は「母性の特徴を理解し、妊娠・分娩・産褥期および新生児期における対象に応じた看護ができる能力を養うこと」で

ある。また、実習目標は① 妊婦・産婦・褥婦および新生児の特徴が理解できる、② 妊婦・産婦・褥婦および新生児の看護の特徴が理解できる、③ 母性看護の対象に必要な基礎的看護技術を修得できる、④ 産褥期における母子の看護過程を展開できる、⑤ 母子保健医療チームにおける看護師の役割が理解できる、⑥ 命を育む過程や誕生に触れ、命

の尊厳について自己の考えを深めることができる、と設定している。

実習期間は2週間で、具体的な内容として1週間は外来での妊婦健診、産科病棟での入院中の妊婦の看護、分娩室での産婦の看護を経験し、1週間は病棟で褥婦と新生児を1組受け持ち、看護過程を展開している。

III. 研究方法

1. 研究対象

2015年度に母性看護実習を終了したA短期大学看護学科で調査協力の得られた学生、計84名。

2. データ収集期間

2015年2月～11月

3. データ収集方法

母性看護実習終了後、学生自身が「命の尊厳についてどのようにとらえたか」を自由に記述し、教員が回収した。

4. データ分析方法

データ分析にはテキストマイニングソフト SPSS Text Analytics for Surveys Version4.0.1を使用した。テキストマイニングという分析方法は医療・看護・福祉の分野での活用が広がっている。看護の分野では人間対人間の研究が多く、質的研究の有用性が高いとされている。しかし、質的研究の分析と解釈の境界線はあいまいで、科学的な妥当性が乏しいことがデメリットとして挙げられる。テキスト

マイニングは科学的な妥当性を補完し、さらに比較的大きなデータの分析に役立つと考えられている。そのため、本研究ではテキストマイニングソフトを使用し分析を行った。

分析に関しては、「感性分析」を採用した。内田ら¹⁹⁾によると「感性分析」は「“文章中に含まれる、人間の心の快適、不快を表明している部分や、その心の動きによって生じた行動を報告している部分”を抽出することができる」とされている。そのため、本研究の分析にふさわしいと考えた。

はじめに、自由記述された内容を Microsoft Excel に1セルにつき1文ずつ入力し、そのデータを SPSS Text Analytics for Surveys Version4.0.1 に読み込み、テキスト中に出現したキーワード抽出を行い単語の頻度を算出する単語頻度解析を行った。

その後、言語学的手法に基づき、カテゴリーの作成を行った後に、記述された内容に戻りカテゴリーの修正を行った。分析の各段階において母性看護教育研究者3名で妥当性を検討した。

IV. 倫理的配慮

研究者である教員から、研究協力者である学生に対し以下の内容を口頭で説明した。

具体的には、研究の目的や意義、個人が特定されない方法でデータを取り扱い、研究以外には使用しないこと、データの守秘管理に努めること。また、回答の内容や不参加の場合も不利益のないこと。研究は、母性看護実

習後の教員評価後に行われ、研究への協力は得られなくても評価に関係ないことである。説明に対し同意を得られた後に、データ収集を行った。

本研究は筆者ら所属大学・短期大学研究倫理委審査委員会の承認を得て実施した（研究倫理審査番号 16-19）。

V. 結果

84名の対象者に対し文章は192文得られ、523個の単語が抽出された。

6.8%、「尊重」5.7%、「周り」5.2%（図1）であった。

1. 単語頻度解析

「命」65.6%、「人」21.4%、「大切」18.8%、「自分」16.1%、「親」13.5%、「1つ」13%、「誕生」11.5%、「尊厳」10.4%、「母・母親」7.8%、「1人」

2. 単語の相互関係

SPSS Text Analytics for Surveys Version4.0.1によるサークルレイアウト（図2）に示す。

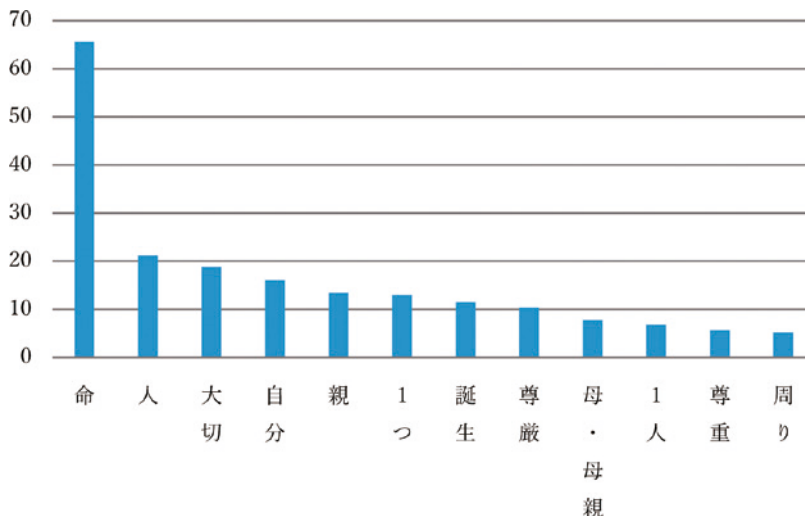


図1 単語出現頻度

3. 有向レイアウト

「命」の有向レイアウト（図3）、「人」の有向レイアウト（図4）で示す。

4. 抽出された単語のカテゴリー分け

① 「命」「受精」「妊娠」「分娩」「誕生」「お腹」を【命・母性】に関連するものとした。

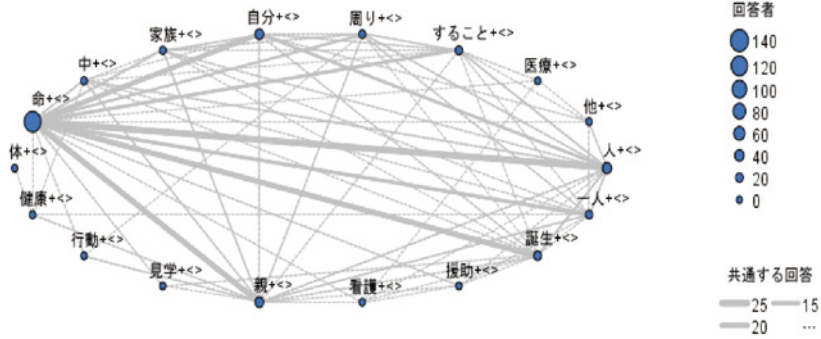


図2 サークルレイアウト

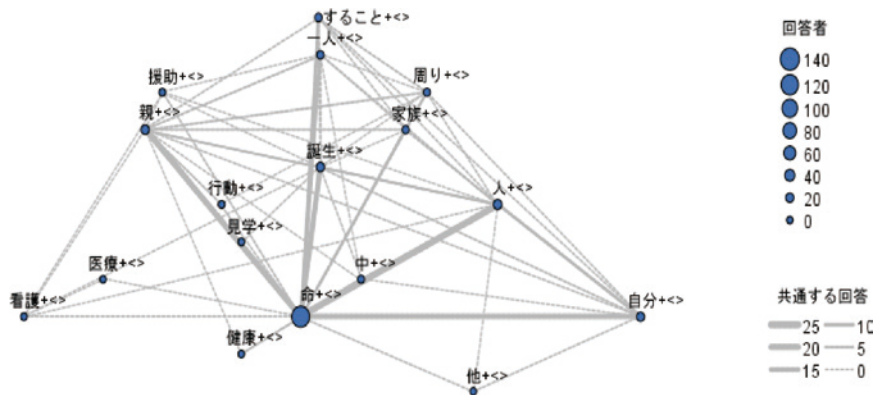


図3 命-有向レイアウト

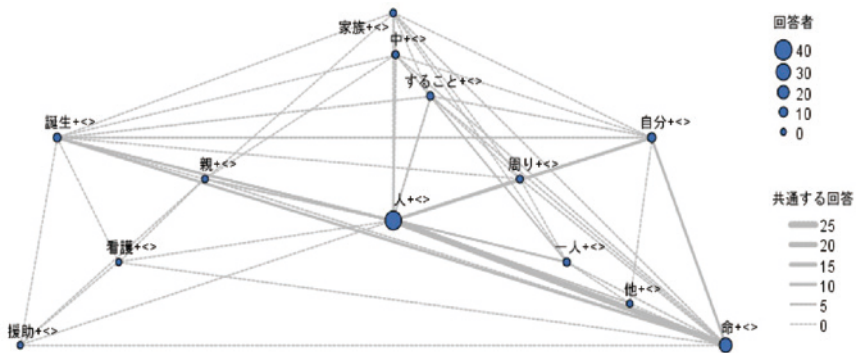


図4 人-有向レイアウト

② 「人」「自分」「親」「母親」「父親」「家族」「周り」を【自分と周囲の人との関係】に関連するものとした。

③ 「医療」「看護」「看護師」「援助」「行動」

「見学」「健康」を【医療や実習】に関連するものとした。

④ 「大切」「尊厳」「尊重」「1つ」を【命に対する価値観】に関連するものとした。

VI. 考 察

母性看護実習終了後に学生が「命の尊厳」をどのようにとらえたかを4つのカテゴリーに分類した。どういった学びがあり、どのような指導が必要であるかを以下に考察する。

1. 命・母性に関連するカテゴリー

母性看護実習では、妊婦、産婦、褥婦、新生児を受け持ち、援助を実施している。その経験の中で大学での学びと臨地実習での学びを統合し、母性看護について理解を深めている。分娩見学はその一つである。

命の誕生の場面に立ち会った学生や、また、立ち会いきななかった学生でも、妊婦・産婦・褥婦・新生児の経過を実習から学ぶことで命の重みを感じることができていた。学生は、実習目標①にあげられている妊婦・産婦・褥婦および新生児の特徴を理解しようと実習していたと考えられる。具体的な記述内容は、「実習では、流産をしている人、やっと妊娠できた人、妊娠したことにより合併症が生じた人など様々なケースがあった。女性が自分の命をかけて新しい命を誕生させるため、私たちは一つ一つの尊い命を今まで以上に大切に考えていくべきであると考えた。」「出産後、母親は表情が穏やかであり安心したようであった。『おめでとうございます』と言った後、とてもうれしそうにしていた。母親のお腹の

中に宿った目に見えないほどの小さな命がわずか10か月ほどで生まれてくる不思議や生命の誕生の素晴らしさを実感した。私は、命の誕生に立ち会えたことをうれしく思い、とても感動した。」等があげられた。

学生は、妊婦の妊娠中の経過や思い、産婦の分娩中の様子から妊婦・産婦・家族の気持ちを知り、看護を学んでいた。実習では一つ一つがすべて重要な経験であることを折に触れて指導している。最終的に「母性」「命の誕生」「命の尊厳」について自己の考えをまとめ、記述できるような指導が必要であると考えた。

2. 自分と周囲の人との関係に関連するカテゴリー

学生は母性看護実習で褥婦と新生児の看護を体験し、自分と母親の関係や自分と家族との関係を再認識していた。具体的な記述内容は、「自分も、母親のお腹で育ち、生まれて、ここまで無事に成長できた。だからこそ、命を大切にしなければならぬと思う。」「大事に育てられて今があるのだと感じた。命を大切にすること、周囲への感謝の気持ちを持つこと大切であると考えた。」等があげられていた。新生児は母親や周囲の人が存在しなければ生きていけない。看護学生として新生児

のケアを経験することで、自分も周囲の支えがあって成長してきたということを感じることができていた。

本研究で対象となった学生は青年期にあたる。青年期とはエリクソンのライフサイクルでは、第5の段階であり、発達課題ではアイデンティティ対アイデンティティ拡散という葛藤が生じるとされている。西平ら⁵⁾は、「この時期を少々乱暴にまとめてみれば、『わたしとは誰であるか』という一貫した感覚が時間的・空間的になりたち、それが他者や共同体から認められているということである」と述べており、さらに「自分の意識的感覚としての自分、周囲からの是認であるといえるだろう」とも述べている。

学生は母性看護実習を通して、「自分」と「周り」の「親」「母親」「父親」「家族」との関係から、自分が何者であるかを考え、自分は自分であるという感覚をつかもうとしており、自分自身の将来像につなげていると考えられる。周囲の人々からの肯定を受けて、自分は自分であるという意識的感覚をつかみ、自分は看護学生であるという感覚をつかもうとしている。みずから青年期の自分を育てていると考えられる。

3. 医療や実習に関連するカテゴリー

母性看護の対象者の特徴は比較的自立度が高く、看護診断においても健康な状態にある対象者をより健康にするというウェルネスの視点で臨む必要がある。また、褥婦と新生児は変化が速く、日々の実習展開に戸惑う学生もいる。

具体的な記述内容は、「妊娠や分娩には、大きなリスクがあり、感動だけでなく、看護

師として異常かないかなど観察や処置をしなければならぬことを学んだ。」「新生児の観察は、その子の将来を左右するものである。その子がその子らしく生きていけるよう看護師は異常の早期発見をすることが大切であると考える。」等があった。実習で学んできた医療における看護師の役割を援助や行動として考えることにより、自身が体験してきた学びを記載していた。

山里ら²¹⁾は、「看護学実習の場で看護学生は『何ものか（看護者）になっていく』という自分づくりにつながり、看護者になるというアイデンティティの形成に影響する」と述べている。また、本多¹⁷⁾は、「分娩に前向きに向かう産婦をケアする助産師の姿は、学生の母性看護観に影響した」と述べている。学生は母性看護実習を通して、看護師の役割を学び、看護学生としての自分を自認し、看護者になっていくためには何が必要であるかを学ぶことができていた。

4. 命に対する価値観と関連するカテゴリー

学生は、母性看護実習後に「命の尊厳」について記述する中で、命に対する価値観を述べられていた。具体的な記述には「命の誕生に触れたことで、たくさんのことを乗り越えながら誕生しているということが分かり、命の大切が学ぶことができた。」「一人一つの命である、一つ一つの命は本人以外の人にも意味のあるもので、代わりのきかないものであるため、尊いものであると考えた。」「命は一人一人異なるものであり、他人と代わるものではない、たった一つの大切なものである。」等があった。

こうした実習を経験することで、学生は「命の尊厳」について自らの言葉で語り、実感を持って記述し、表現できていた。命をかけが

えのないものとしてとらえている価値観が、学生の考えや態度とともに看護観へと影響していくと考えられる。

VII. 結

母性看護実習終了後、学生が「命の尊厳」をどのようにとらえたかの自由記述から内容分析を行った。結果、学生が「命の尊厳」について考えている「命・母性」「自分と周囲の人々との関係」「医療や実習」「命に対する価値観」というキーワードを抽出することができた。母性看護実習での経験や振り返りが、命の尊厳や自分の誕生の振り返り、親への感謝、自己の母性観や看護観について深く考え

語

るきっかけとなっていた。母性看護実習で学ぶことのできる生命の誕生、新しい命を育むという場面から、「命の尊厳」について考え学ぶことのできる教育や実習指導が重要であることが示唆された。今後、学生個々の記述のみでなく、カンファレンスを通して学生同士で体験を分かち合うことによって、共有する機会を作っていきたいと考える。

謝

本研究に際して、ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。本研究は平成27年度筆者ら所属大学短期大学後援会特別研究

辞

助成金を受けて行った研究である。また、結果は日本母性衛生学会第57回学術集会（東京都）にて報告した。

引用参考文献

- 1) 文部科学省 (2011): 「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」. 23-24.
- 2) 日本看護協会 (2003): 看護者の倫理綱領. 1-2.
- 3) 阿部真 (2014): テキストマイニングによるリーディング授業の理解度分析. 情報学研究, 3, 164-168.
- 4) 海老根理絵 (2008): 死生観に関する研究の概観と展望. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 48, 193-202.
- 5) Erik H. Erikson (1979): Identity AND THE Life Cycle. International Universities

- Press, Inc./ 西平直、中島由恵 (2013): エリク・H・エリクソン アイデンティティとライフサイクル、誠信書房、東京。
- 6) 藤田彩見、金山時恵、矢庭さゆり (2014): A 大学看護学部看護学生の地域看護学実習における学生の学び. 新見公立大学紀要、35, 113-118.
 - 7) 井村弥生、平澤久一、林朱美ほか (2013): 看護学生の一次救命処置演習の実施による認識の変化—配置投影とテキストマイニングによる演習前後の比較—. 関西医療大学紀要、Vol. 7, 23-33.
 - 8) 石田順子、石田和子、神田清子 (2007): 看護学生の死生観に関する研究. 桐生短期大学紀要、18, 109-115.
 - 9) 糸島洋子 (2005): 死生観形成に関する調査. 京都市立看護短期大学紀要、30, 141-147.
 - 10) 中村和彦、畑亮輔 (2015): 地域包括支援センターにおける精神保健福祉士の役割と業務—4 職種のグループインタビューに対するテキストマイニング分析から—. 北星学園大学社会福祉部北星論集、52, 145-157.
 - 11) 贅育子、三宅絢花 (2014): 母性看護実習に対する女子学生の実習前のイメージ、実習中感じたこと、実習後の思い—テキストマイニングによる分析—. ヒューマンケア研究学会誌、5(2), 21-28.
 - 12) 贅育子、小幡孝志、室津史子 (2014): 母性看護実習における男子学生の思い. ヒューマンケア研究学会誌、5(2), 29-36.
 - 13) 二宮寿美、村山美香、長川トミエ (2010): 大学生の母性看護実習前・後における妊婦・褥婦・新生児のイメージ変化. 宇部フロンティア大学看護ジャーナル、3(1), 31-39.
 - 14) 大野知代 (2001): 母性看護学における学生の分娩見学の重要性について. 藍野学院紀要、15, 7-17.
 - 15) 武田江里子、小林康江、加藤千晶 (2013): 産後 1 か月の母親のストレスの本質の探索—テキストマイニング分析によるストレス内容の結びつきから—. 母性衛生、54(1), 86-92.
 - 16) 徳田真理子、甲斐寿美子 (2007): 母性看護実習における学生の意識変化. 帝京平成看護短期大学紀要、17, 21-25.
 - 17) 本多洋子 (2006): 分娩見学の学びの分析. 桐生短期大学紀要、17, 209-214.
 - 18) 内田真紀 (2016): テキストマイニングの臨地実習前学内演習教育評価への有効性の検討. 福井県立大学論集、46, 13-21.
 - 19) 内田治、川嶋敦子、磯崎幸子 (2012): SPSS によるテキストマイニング入門、オーム社、東京都.
 - 20) 和田佳子、藤井智恵美、岸田泰子 (2015): 母性看護学実習が看護学生の描くライフコースに与える影響と看護学生による実習評価との関係: 実習の満足度、技術経験項目、自己評価との相関関係. 共立女子大学看護学雑誌、2, 10-16.

- 21) 山里久美、堀薫夫 (2014): 成人教育の視点からみた、看護学生の社会的スキルと看護実践能力を育む教育の可能性. 大阪教育大学紀要 第VI部門、63(1), 181-192.
- 21) 大和里美 (2010): キャリア教育における参加型授業の有効性に関する検討—テキストマインディングによる効果分析—. 太成学院大学紀要、12, 139-149.